

ベケットを読む女：バスのうえのコトバ

～^{センス}意味と無／^{ナンセンス}意味と^声コエの言語操作～
(davis & voice & sentence)

岡田 和也

New York の短編小説家 Lydia Davis (1947-) の “Southward Bound Reads *Worstward Ho*” (2007) は, Samuel Beckett (1906-89) を再話する (あるいは, 再話している…再話しているんじゃないかと解釈できる)。

文質(intensity of sentence; sentence quality)——文の質度——というものがあるとして, あるとしてだが, そして, それが作家の比較に少しでも役にたつとするならばだが…, この二人は, とても似通っている。

そのことを, Davis の中の作家的 Beckett 的要因としての類似として指摘するに終わるだけではなく, はたまた, Davis 自身のインタビューでの同様の同意を繰り返すだけでもなく, ここでは, re-edit のコンセプトを導入して, 本論の試みの礎とし, ‘ベケットを読む女’としてのモチーフを展開する。

Keywords : Lydia Davis, Beckett, “Southward Bound Reads *Worstward Ho*”, Mark Doty

As long as she is alone, sitting in the back of the van, she does not read but looks out the window. ... The van is quiet, so she reads *Worstward Ho*. The first words are: “On. Say on. Be said on. Somehow on. Till nohow on. Said nohow on.”

----- *The Collected Stories of Lydia Davis* より

ここはひとつの名を抹消することから始まる
それはひとつの名であるか、物語の名であるか

----- 朝吹亮二 『opus』「00」より

先の拙論「“Her ear too is a shell”: 貝の耳・耳の貝～文字と音声と言語操作～」は, Joytt ⇔ sound poem(s) ⇔ 声／言葉の乖離という流れを含んだ論文であった。¹ 本論は, (敢えて野太い表現をすれば,)

音のぶつぎり, 意味のぶつぎりの回収／改修 (の可能性・不可能性) がテーマである。

また, ここでは, 声と意味の, そして, 無意味についての, 周縁性(≦プロセス)を問題化する。そうしたことは, 言葉の翻訳・翻訳の言葉とも関わってきて, すなわち, re-edit の概念のことが連なってくるのだけれども…, それは, 物語の周縁・終焉との関係とも深く関わってくるのだけれども…。事

¹ 『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第147号 (2011), 所収(19-25頁)。ここでは, 前回論文で予告しておいた通り, Mark Doty の作品の最後に入れて, 比較対照、逆照射していく。

実、Lydia Davis は何より最初はすぐれたフランス語からの翻訳家としてその仕事を始めたのだけれども…。

そうなのだけれども…、それにしても…、そこで見えてくるのは、やはり声の言葉（スポークン・ワード／スポークン・ランゲージ）の問題の重要さである。

さらに詳しくは、以下の本論のセクション3で、述べるが、この点が先回の拙論と本論の共通しているもっとも興味深い点であり、語るべき箇所である。

以下の議論は、ところで、2012年3月に Lydia Davis に直接会い、質問とディスカッション、さらに講義への聴講をした後、時間をかけて考察を試みたものである。（ああ、それにしても、記録的に暑かった3月のNYが思い出される…。）

あのインタビューがある成果としてここにまとまってくれていれば幸いである。まず、考察したい項目は以下のとおり。挙げていこう——これらを複合的に分析していく：

- ①2009年 に *The Collected Storires of Lydia Davis* が出版されて、数年来の集大成がなされた Lydia Davis の話法手法の問題を再確認する
- ② Samuel Beckett の声の問題の前景化を試み、*Worstward Ho* (1984) と Lydia Davis への照合・照射する
- ③ Beckett の *Worstward Ho* の再読として、Lydia Davis の “Southward Bound, Reads *Worstward Ho*” (2007) を比較する（換言すれば、バスに移動と物語を読むという行為を重ねることで、バス・ライド＝再読として、意義づけてみる）。
- ④ Mark Doty (1953-) の “Magic Mouse” (2008) を voice performance/language art の立場から、声の考察・分析をして解釈としていく。

さあ、以上のようなアジェンダを意識して、進めていこう。

———

Beckett を言語の伝統と革新の系統・系譜からの Davis をもって論議をしようとする、興味深いことに、日本の詩人・朝吹亮二、のふたつのタイプの作品が有益になる。

すなわち、『密室論』（1989年）からの1篇と『まばいばかりの』（2010年）の冒頭からである。

まず、彼のスタイルがあらわれていて、より密室的な『密室論』から、第92番を——

92

べつの／うまれ／をいき／よ／
とこえは／めいれいす／る／べつのよくぼう
を／よみ／と／けとか／たり／かけるこ／の
くう／げき／…²

この場合は、漢字への変換を通じて、意味／不意味、とか、音声となる言語のありかた、を意識させられるが、それは、Joyce の場合だと、spelling の問題でもあった。スペリングの地平で理解ができるタイプの、カテゴリーのものであった。ここには、置換されると、再現され再利用できる言葉がある。

別の、カテゴリーを見つけるには、例えば朝吹の詩集『まばいばかりの』がいい。「贈り物」という作品の始まり…

さんの庭にはいっぼんの巨樹があつてけれどもそれはまだほんのこともだからやわらかな小枝と葉をのぞかせているだけなのだがやがてほんとうの巨樹になつてかつて森であつた町をみおろすだろう…³

もう、すでに、庭には、にはあやしさがあすぎる。怪しすぎるくにわにわにわにわにわの庭の二羽の鶏の言説が、とにかく浮かび上がる。仕方なく。仕方ないように。それでも朝吹は、その古めかしさを決して含ませていない。うまく、奇妙な唐突な「さん」ではじめ、ている、しいー、本のこども、の、ホンノコども、として、さらには、歪な、木が一本の連想嫌、本⇔1本⇔木、葉⇔菌⇔は、というこの・その流動性をたくみに操って操られず操っているからだ。

句点も、読点もない文章がつづいている。⁴隔てられた段落がえがないので、意味のぶつ切りもない、が、これは、他の意味で、ぶつ切りにされているこ

² 『朝吹亮二詩集』（思潮社、1992）、p. 105。

³ 朝吹亮二『まばいばかりの』、p. 3。

⁴ <http://blog.goo.ne.jp/shokeimoji2005/e/2bb7cc29da77c50d6da3cd25fe6b8ec3>

ともなく、音・声に繋がっていきやすいということなのか。あの音よりも。声として…。

そう考えてくると、二つの例の比較から分かるのは、アイルランドの生んだモダニストの二人をめぐる、言語の方向性の、言語と声に方向性の、言葉声のありかたの違いであることが、分かる。

すなわち、一方に、朝吹の「92」にあたる方の、Joyce が。他方に、朝吹の「贈り物」にあたる方の、Beckett が。

ここには、断片化と言葉の、2つの大きな側面が、あらわにされている。そう Beckett の方へ。それは、そう…Davis の方へ。

002: Davis の方へ

最初に、朝吹亮二を経由して、Beckett から、Davis の方へ。そうそう…すでに、Lydia Davis の方に行っているのだが…。

この経由は、例えば、英文学者であれば、ヴォキャブラリーとして、Beckett との類似を、批評家なんかも、察知していて：

Davis has described Samuel Beckett as an important influence: "What I liked was the plain, Anglo-Saxon vocabulary; the intelligence; the challenge to my intelligence; the humour that undercut what might have been a heavy message; and the self-consciousness about language." All of these elements are evident in her prose and, like Beckett, she has, over time, become increasingly extreme in her brevity.⁵

だが、より興味深いことに、Davis 自身がこうコメントしている。『ビリーバー』(*The Believer*) のメール・インタビューで、もっと明示的に…もっとはっきりと…そう、その質問とは――

BLVR[Believer]:

You've said Beckett was a deep influence from the beginning of your career as a reader.⁶

⁵ Alyssa McDonald - 20 August 2010

<http://www.newstatesman.com/fiction/2010/08/lydia-davis-stories-characters>

http://www.believermag.com/issues/200801/?read=interview_davis

であったのだ。

その Davis が到達した一つの彼女だけのスタイルによる文章の冒頭がこうだ。見事にストイックで、他のコミカルな作風と一線を画しながら、しかし、深遠にこれまでの議論を展開させてくれる。

是非とも引用しよう――

Sun in eyes, faces east, waits for van bound for south meeting plane from west. Carries book, *Worstward Ho*.

In van, heading south, sits on right or west side, sun in through windows from east. Highway crosses and recrosses meandering stream passing now northeast and now northwest under. Reads *Worstward Ho*: On. Say on. Be said on. Somehow on. Till nohow on. Said nohow on. †⁷

そうした作品がまとめらのが2009年である。(【図版③参照】)

003: re-edit ~*Worstward Ho*~Voice and Void~ (a) Davis と Beckett と

Lydia Davis の“Southward Bound Reads *Worstward Ho*” (2007年出版の短編集 *Varieties of Disturbance* に所収) で、興味深いことは、収集作品にする際、2つのヴァージョン両方含ませていることだ。(【図版①および②参照】に2つに並行したものを作ってみた)

Davis の物語は、Beckett が1984年に出版した *Worstward Ho* をなかなか読めないでいる女主人公、というプロットを持っている。⁸

そうしたプロットらしくもないプロットを持つ作品に注目をして、僕は実際、これ以上興味深いことはない、ほどに、ステキな、話を聞けたが、…。直接の対談で、僕は彼女に、なぜそれが Beckett でなきゃならなくて、とか、彼女は、たまたまそうだった

⁶ http://www.believermag.com/issues/200801/?read=interview_davis

また、同質の大切な資料として、2010年に出版されている次のもの：Josh Cohen “Reflexive incomprehension: on Lydia Davis”, *Textual Practice* 24(3), 2010, 501-516.

⁷ Davis, Lydia (2010-08-05). *The Collected Stories of Lydia Davis* (p. 572). Penguin UK. Kindle Edition

⁸ Cf., Charles Krance, “*Worstward Ho* and *On-words*: Writing to(wards) the Point (in Lance St John Butler and Robin J. Davis (eds), *Rethinking Beckett*, 1990), pp. 124-40.

たのよ、って答えたので、それじゃあ、その最後に読んだのはいつだったわけで、書棚から引き出したのはどういういきさつなんだろう、って問いかけたら、さらに面白い問題わねっ、って言ってくれたりもした。(【図版④および⑤参照】)

だが、しかし、僕が感触として得た最重要点は、2007年以降に始まった(図版①②にみられる)ヴァージョンの相違の間で、それが、平行の中で、あるいは、re-editとして、Davisの中で大きく揺れていて、それは、文体と蜜に関係していて、さらには、Beckett的要素とリンクしているということ。

彼女の *Breaking It Down* (1986)⁹ その Davis の再話的な手法に注目したい。その作品集の中に複数部含まれている。極めておもしろい！Beckettの *Ho* の作品が、同じくこの *Breaking* の作品と同じ1986年！

(b) Beckett を読む Davis

Beckett の *Worstward Ho* はかなり実験的であったのだと、Finny の言葉により確認できる。

Worstward Ho is about the inadequacy and treachery of language. ...¹⁰

minimalism なのか、cutoff なのというもんだいが、非常に、興味深いこととして、こんな意見が……”

In *Worstward Ho* the sound/sense relations are extended to antonyms of a most unusual kind” としながら、の意見。続いて¹¹——

Spoken language, even when delivered in the ‘ersy-versy’ syntax of *Worstward Ho*, normally presupposes a speaker, but in this fiction Beckett makes us hear the rhythms of speech without the intrusion of a identifiable speech act. ... with no such mediating presence ... at the same time it allows us to study language in a pure

sense.¹²

そして、もともとのタイトルのは、おそらくだが、Charles Kingley の *Westward Ho!* とだ。『西へいこうよおー』。なにににしに…「さいあくににしにいこうよお。ほおー！

敢えて、＜死に＞と…。西に…への連想…へと。…の方へ、と。それを、Davis はとりこんでいると思うのだ。そう思える。バスの言説をたくみに構造化して。

(c) Voice and Void

さて、ところでだけど、いまさらながらに、Davis と Beckett の関係。¹³

このことは、void のコンセプトの著者である Johnes がコメントしている、その一方で、Steven Connor も——

... to borrow the paradoxical notion of *Worstward Ho*, it might be ‘grot in the void’, a fold of imaginary space within absence itself If this is so, then the stage-space might seem like a provisional or hypothetical space, which is less ‘real’ even than the reduced exterior that Clov sees.¹⁴

としている。また、Beckett の *Westward Ho* のを太文字(ボールド)をオリジナルで表記して、付加した読みを、挿入しているのが、Colin Greenlaw のサイトである。¹⁵

思い出さなければならないのは、忘れてはならないのは、Joyce の場合は、意味が揮発するする、うねった、そういう地平で、消失して、それから、そのうねりの有様を活字におさめ、そして、読者は、その横溢と麻痺のうちを漂っていく、ものであった。

これは、だから、残されていく＝残っていくフラ

⁹ 『うそをやめさせてくれ』あるいは、『冗談じゃあない』って訳をするかな…くらい。

¹⁰ Brian Finney, “Still to *Worstward Ho*: Beckett’s Prose Fiction Since *The Lost Ones*”, James Acheson and Kateryna Arthur(eds.), *Beckett’s later fiction and drama* (1987 Macmillan) p. 76.

¹¹ Enoch Brater, “Voyelles, Cromlechs and the Special (W)rites of *Worstward Ho*” [pp. 160-174] p. 169 James Acheson and Kateryna Arthur(eds.).

¹² Enoch Brater, “Voyelles, Cromlechs and the Special (W)rites of *Worstward Ho*” [pp. 160-174] p. 170.

¹³ Brian Finney, “Still to *Worstward Ho*: Beckett’s Prose Fiction Since *The Lost Ones*”, James Acheson and Kateryna Arthur(eds.), *Beckett’s later fiction and drama* (1987 Macmillan) p. 66.

¹⁴ p. 143 (*Samuel Beckett: Repetition, Theory and Text*): 1988

¹⁵ http://www.samuel-beckett.net/w_ho.htm。そしてまた、kindle version も

グメントだから、組み合わせをする、そういう作業だ。
だが、一方、Beckett の場合は、省略であり、揮
発とかではない。埋めてもらうことを前提にした、
そういう種類の省略。あてにされているスタイルだ
からこそ、re-edit と繋がってくる。

In most of his later plays, Beckett has
allowed his characters less and less
room, fewer and fewer opportunities to
explore the space that they occupy. ...
And in later plays, where the available
space for viewing is reduced to that of
a head, face, or mouth, we lose almost
entirely the means of relating it to its stage
environment.¹⁶

そして、その分析はこう続く、

... so that, in the sensory deprivation of
the auditorium, we may begin to wonder
whether the head is not gazing down upon
us. Similarly, the mouth in *Not I* seems
impossible to assign to any imaginable
theatrical space, despite the shadowy figure
of the listener. Hearing the description of
the woman who finds herself in the dark,
we may share her sense of vertigo: ...¹⁷

004: Mark Doty の方へ

Mark Doty (1953-) の声をここで聞いてみる事
にしてみようか。Doty の朗読には定評がある。¹⁸

New York の大通り沿いの、vendor のひとり
が、「魔法のマウス」を売っている。大道芸人的だ
が、そのときの、大売り出しの声は、Joyce 的で
alphabet をこえていく。

Scrap of fur or fabric scrambles hand to
hairy wrist,
flees into the hole thumb and forefinger
make
in the fist, most warm days, Sixth Avenue

and 14th Street:

便利な YouTube もあるから、New York のその
あたりのことは、想像できる。

さてさて、さあて、大道芸人や、路上のパフォー
マーを、目の前にしながら、3月に思ったのは、
Lydia 的世界との関係である。(【図版⑥参照】)

Doty の詩はこう続く——

big-headed guy squats hands outstretched
and the toy
slips knuckle to back of the other hand,
scurries to the nest
as if of its own volition while he blares
over and over

same flat vowels, somehow half the time
trumping
layered horn and airbrake and din without
apparent origin,
raising his terms above the avenue as if he
peddled

not the thing itself but its unprintable
name:

とここまできて、この後が、最高のピーク！

MAHJIK MAOWWZ,
his accomplishment, a phrase the alphabet
refuses,

この部分、拙訳を試みれば…

むむまあ〜うあ〜じっく むまあうむうあう
〜ずうづう〜
そのどでかい声は、アルファベットにするの
を拒絶していたのだ

鼻にかかったシラブル。母音、極度に引き延ばし。
路面の上を弧を描くように、投げるように飛ぶよう
に、声が…。ここに音節と意味が、遙かにこえた鳴
動が…。そして——

MAH as in Nah as in No way,
JIK the voice's arc fallen hard back to the
sidewalk, MAOWWZZ

¹⁶ Steven Connor, *Samuel Beckett: Repetition, Theory and Text* (Basil Blackwell Ltd., 1988), p. 145.

¹⁷ Connor, p. 146.

¹⁸ 先回の「貝の耳・耳の貝」(『岡山大学大学院教育研究科
研究集録』第147号 (2011), p. 19.

a bridge with a long slide in the center. It
won't work

unless you're loud, seal your nasal
passages,
inflect five syllables in blat and euphony,
then the little three syllable follow-through,

price-tag vocalize tailing away like an
afterthought:

ONE DOLLAH. Even halfway down the
block he's altered the air,
made the spine around which some fraction

of city arranges itself, his beautiful thing
in diminishing coda as you're farther away:
Magic Mouse, one dahlah. I practice, I
can't

get it right. Maybe what's required is
resistance:

indifferent citizens impelled in four
directions,
scraps of cell-phone recitations into private
ethers,

mechanical sobs his syllables cut through
and against.

Maybe it's the sheer persistence of the ugly
span

of phrase lifting up and over what it's built
to represent,

or else the engine of his song's the nothing
that could contain that tumbling scrappy
model

of a living thing in his hands,

so he says it again and again

—while the little toy, all the word
won't hold, always escaping,
goes on with its astonishing work.

005: 再び Lydia の方へ～バスの方へ～

Beckett の *Worstword Ho* の僅かながらの貴重な

雑誌論文を数本たよりに、Davis を読みながら考えたのは、¹⁹やはり、こんなことであった。。

すなわち、こんなこと、van に乗っている Davis が描く女主人公。van だが、bus といっても言い。

狭い意味だとトラックくらいになる。僕の Davis との直接の会話でも、「public transportation はね…」とか、出てきたし、また、空港のシャトル・バスの途中立ち寄るものは、バス停的なものがあるということで、「バス」だ。それに、トトロのジブリのあの van のようなのを、猫バスというではないか。

そこで、バスに乗ること、バスのうへの言葉、となる。なぜか、不思議に、バスの上だと、Beckett 的言葉は、読者に入って来やすいのではないか。そうなのではないか。そして、より、Davis の作品を知り、他の可能性を広げられないだろうか、と。

006: 翻訳と Davis ～そして、まとめの方へ～

Davis のこれまでの作品集の中に、岸本佐知子による翻訳に、こんな作品がある(【図版⑦参照】):²⁰

十二人の女が住む街に、十三人めの女がいた。
誰も彼女の存在を認めようとはしなかった。
手紙は彼女に届けられず、誰も彼女のことを
語らず、誰も彼女のことを訊ねず、誰も彼女
にパンを売らず、誰も彼女からものを買わず、
(中略) 彼女の寝床は眠られず、彼女の食事は
食べられず、彼女の服は着られなかった。
そういったことすべてにもかかわらず、彼女は
人々の仕打ちを恨みもせず、その街に住み
つづけた。²¹

それを、すこしだけ手を加えて、こんなふうに変化
させてみよう——

十二人の女が住む街に、
十三人めの女がいた。
誰も彼女の存在を認めようとはしなかった。

¹⁹ James Acheson and Kateryna Arthur(eds.), *Beckett's later fiction and drama* (1987 Macmillan).. 特 に, Enoch Brater, "Voyelles, Cromlechs and the Special (W)rites of *Worstward Ho*" [pp. 160-174] 及び Brian Finney, "*Still to Worstward Ho: Beckett's Prose Fiction Since The Lost Ones*" [pp. 65-79]

²⁰ リディア・デイヴィス, 『ほとんど記憶のない女』(白水社, 2005)

²¹ 同書, 7 ページ。

手紙は彼女に届けられず、
誰も彼女のことを語らず、
誰も彼女のことを訊ねず、
誰も彼女にパンを売らず、
誰も彼女からものを買わず、（中略）
彼女の寢床は眠られず、
彼女の食事は食べられず、
彼女の服は着られなかった。

そういったことすべてにもかかわらず、
彼女は人々の仕打ちを恨みもせず、その街に
住みつづけた。

つまり、行替えをすることで、ポエムのように、
re-edit できるが、これは、実は、極めて近いのは、
① Beckett の創作を re-edit している批評家たち②
自分の作品を2つヴァージョンづくり並行的に表記
した Davis の姿勢。

ちかい。ちかい。極めて近い。このあたりを、敢
えて、自らの作品と親近感から、引用してみる。詩
集『彼岸バス』。あ、詩集が、バスが見え隠れする
作品群だが…そんな中での、一篇——

おんなしじんが
そのこうけいに
あしをいれると
みいいるみいいるううちに
彼女のまわりのえんきんほうが
くうずうれえてしまつった。

の) だが

…（中略）

おおきなくろの
ナイロンぶくろからとりだしたのは
バケツのように泣くひとのためのバケツと
バケツのように笑うひとのためのバケツ
あるいは
バケツのように過去のことばかりを
ふりかえってしまうひとのためのバケツで
あった

の) だが

…（中略）²²

連綿と、列挙が、連々と続かせているところが、そ

の両者の親近だ。

— — — —

言葉とは、どこまで重ねられるだろうか。敢えて、
強引なところのあるコラボをしてみた。（【図版⑥参
照】）

これは、中に、Davis の直筆があるテキストを、
Doty のあのニューヨークのいるのは、それが、も
しかしたら、可能性かとも思っ。温かい日の6番
街14通りまで行って、パフォーマンスをしてみたわ
けである。

そして、その横に、もちろん、バスの姿も。

²² みごなごみ『彼岸バス』、88-94ページ。出版後、著者変
更。あ、そうだ、『彼岸バス』だから、パンにのる、行為であっ
た。（これだって、あの老婆のあのシーンは本当に、あのま
んま…”it happened!!!!” “It happened!!!!” だったんだもの。）

Southward Bound, Reads

Worstward Ho

Sun in eyes, faces east, waits for van bound for south meeting plane from west. Carries book, *Worstward Ho*.^{*}

In van, heading south, sits on right or west side, sun in through windows from east. Highway crosses and recrosses meandering stream passing now northeast and now northwest under. Reads *Worstward Ho*: On. Say on. Be said on. Somehow on. Till nohow on. Said nohow on.[†]

571

Road turning and van turning east and then north of east, sun in eyes, stops reading *Worstward Ho*.^{*}

Road turning and van turning east again and south, shadow on page, reads: As now by way of somehow on where in the nowhere all together?[†]

Road and van turning briefly north, sun at right shoulder, light not in eyes but flickering on page of *Worstward Ho*, reads: What when words gone? None for what then.[‡]

Van turning off highway, sun behind, sun around and in window and onto page, does not read.

572 | VARIETIES OF DISTURBANCE

^{*}She waits near the highway before the entrance of HoJo's for the van going south. She is going south to meet a plane coming from the west. Waiting with her is a thin, dark-haired young woman who does not stop walking back and forth restlessly near her luggage. They are both early and wait for some time. In her purse she has two books, *Worstward Ho* and *West with the Night*. If it is quiet and she reads *Worstward Ho* on the way south, when she is fresh, she can read *West with the Night* on the way back up north, when it will be later and she will be tired.

[†]The van arrives and she takes care to sit on the right side, so that as they travel south the sun will not come in through her window but through the windows across the aisle from her. It is early morning, and the sun shines in through the windows from the east. Later in the day, as she returns north, she thinks, it may be late enough so that the sun will come through the windows from the west.

The highway she travels crosses and recrosses a meandering stream that passes now northeast and now northwest under her. As long as she is alone, sitting in the back of the van, she does not read but looks out the window.

Soon the van pulls up in front of a shopping mall. The restless young woman with the dark hair immediately stands up and remains standing in the aisle looking at the other passengers and out the windows. Two women board the van. They smell heavily of face powder as they walk past her to sit in the back near her. Now, since she is no longer alone, she begins to read.

The van is quiet, so she reads *Worstward Ho*. The first words are: "On. Say on. Be said on. Somehow on. Till nohow on. Said nohow on." She is not very pleased by these words.

^{*}But soon after, she reads a sentence she likes better: "Whither once whence no return." After that, for a while, some sentences are pleasing and some are not.

The van travels almost due south down the highway. Sometimes it leaves the highway, the sunlight circling around behind all of them, to make a stop and pick up more passengers. At each stop, the restless young woman stands up and looks around in a commanding way. The passengers who get on to the van are mostly women.

She reads on comfortably for some miles, but when the road turns, and the van turns with it, east and then north of east, the sun is in her eyes and she cannot read *Worstward Ho*.

[†]She waits, and when the road turns east again and then south, a shadow falls on the page and she can read. With difficulty, though the light is good, she reads such words as "As now by way of somehow on where in the nowhere all together?"

[‡]If the van turns briefly north, so that the sun is at her right shoulder, the light is no longer in her eyes but flickering on the page of the book, illuminating but further confusing such already confusing words as "What when words gone? None for what then."

【図版①】

(Lydia Davis の "Southward Bound, Reads *Worstward Ho*" の 2 ヴァージョンをインテグレートしたものの, [その2の1])

Southward Bound, Reads Worstward Ho | 573

Van pointing east motionless in station, in shadow of tree, reads: But say by way of somehow on somehow with sight to do.*

Van pointing south and moving, reads: So leastness on.

Van turning off highway, sun behind, sun around and in window and onto page, does not read.

Van pointing east then north of east motionless, in treeless station not in shadow, sun in face, does not read.†

Van turning, sun ahead, sun around and in opposite window, shadow on page, van pointing south and moving, reads: Longing the so-said mind long lost to longing. Dint of long longing lost to longing. Said is missaid. Whenever said said said missaid.‡

574 | VARIETIES OF DISTURBANCE

Van turning off highway, sun behind, sun around and in window and onto page, does not read.*

Van turning last time back onto highway, sun ahead, sun around and in opposite window, shadow on page, reads: No once. No once in pastless now.

Van turning last time off highway, sun ahead, sun around and in window, does not read.†

Van farthest south motionless in shadow, pointing north, reads last words: Said nohow on.‡

*Now the shade of a tree by a small gas station allows her to go on to read: "But say by way of somehow on somehow with sight to do." While the driver makes a phone call, one woman leaves the van to try to find a working bathroom, fails, and returns to the van.

The van resumes going south and she reads with pleasure and some understanding: "Now for to say as worst they may only they only they." And then with more pleasure: "With leastening words say least best worse. For want of worse worst. Unlesseable least best worse." And then soon there is something a little different: "So leastward on. So long as dim still. Dim undimmed. Or dimmed to dimmer still. To dimmest dim. Leastmost in dimmest dim. Utmost dim. Leastmost in utmost dim. Unworsenable worst."

The sun in another small gas station stops her from reading, heat and brightness coming in her window, what was the west window when the van was heading south but probably must be considered the east window just at this moment. While the driver makes another phone call, two women, now, leave the van to try to find a working bathroom, fail, and return to the bus.

†The van heads south again.

‡Though she is several pages farther along, some of the words are the same again: "Next fail see say how dim undimmed to worsen. How nohow save to dimmer still. But but a shade so as when after nohow somehow on to dimmer still."

Then there is something new at the bottom of the page: "Longing

the so-said mind long lost to longing. The so-missaid. So far so-missaid. Dint of long longing lost to longing."

Then a combination: "Longing that all go. Dim go."

Soon after, with confusion, she reads: "Said is missaid. Whenever said said said missaid." She misunderstands and reads again: "Whenever said said said missaid." Then a third time, and when she imagines a pause in the middle of it, she understands better.

*At the next stop, the van driver calls out for "folks Benson and Goodwin." The Benson couple and the single Goodwin, sitting forward in the van, identify themselves as "Two Benson and one Goodwin." It takes the driver a very long time to find their papers. While he is searching, three women, now, leave the van, find a working bathroom, and return to the van.

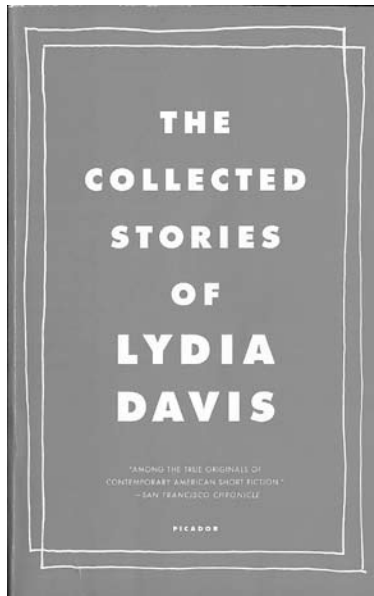
Now each time the van stops, it stops with the sun coming in what was the west window but is now the east window, preparing to turn right and head south into the sun again. Now she has grown used to waiting with the sun on her face and on the page and watching the asphalt outside and the other passengers inside until the van turns and goes on south.

†Near the end of the book, she reads: "No once. No once in pastless now," and just now the van passes a cemetery near the airport and she sees many white stone angels, their wings raised.

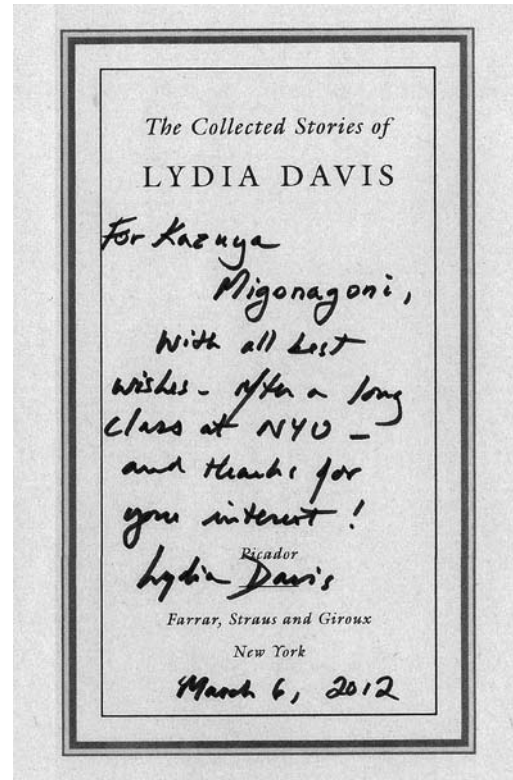
‡By the time she reaches the end of her trip south, the southernmost point in the van's route, from which it will head north again, she has finished the book, which is not long. Although she has liked many of the words that came in between, its last words, "Said nohow on," say as little to her as its first, "On. Say on. Be said on."

【図版②】

(Lydia Davis の "Southward Bound, Reads Worstward Ho" の 2 ヴァージョンをインテグレートしたものの, [その2の1])



【図版③】
Lydia の全集へのサイン。



【図版④】
Lydia の全集へのサイン。



【図版⑤】
Lydiaのインタビューを行ったニューヨーク大学の一角。



【図版⑥】
敢えて、Lydiaの（サイン）本を、Dotyの街頭にもっていき重奏化させてみる、パフォーマンス。



【図版⑦】